

居候先であるアルテミエフ邸に戻った吾華音は、アンジェリカがまだ戻っていない事を知らされる。叔母曰く、

「大丈夫よ、パパが一緒だから」

「ええ！？おじさまも？」

久しぶりにアンジェリカがステージで歌ったらしく、親しい飲み仲間の友人からの電話を受けたアンジェリカ父は、こうしちゃいられないと身支度もそこそこに執事に運転を任せて店に飛んで行ったのだそう。

アンジェリカの一番のファンは彼であり、それは自他ともに認めるところ。アメリカのさる著名なショービズ界の大御所が「彼がノーと言えばノーだ」と言ったことで、アンジェリカは父の庇護の元現在無事日本に戻っている。

愛すべき親バカ紳士として、かの界隈の音楽好き酒好きの間では有名で、彼自身も若い頃から評判の高いジャズピアニストとして知られている。今頃、愛娘のために久々にアドリブで歌うような演奏を披露している事だろう。

笑顔で「朝帰りだと思うから、吾華音は気にしないで今日はもう休んでいいのよ」と言う叔母の言葉に甘えて、途中湯船で居眠りしかけつつパジャマ姿で自室に戻った。

先程のブレインストーミングの内容を整理すべく作業用タブレットの電源を入れるも、またも居眠りしかけて額を画面に軽くぶつけ、作業を諦めてiPadを手にベッドに横たわる。しかし、程なくiPadの画面を点けたままで寝落ちてしまった。

「あれ、私何しようとしたんだっけ」

あたりが、その夜の疲れきった吾華音の最後の思考だった。

翌朝。吾華音の身体はタオルケット※で覆われていて、iPadはベッドサイドのスタンドにきちんと立て掛けてあった。ホームボタンに触れるとアンジェリカからのショートメッセージが。

※雪国生まれの召苗姉妹は、2人とも厚手の掛け布団や毛布が苦手。

『おはよう。残念な胸にならないようにせめてiPadはお腹に載せるべき』

吹き出すのを堪えて「くっ」と横を向いた後、08:30という時間表示を見て「やっば！」と寝惚け眼から瞳を見開く。ちょっとしたドタバタの後リビングに降りてくると、メイドのおばさんが笑顔で。

「おや吾華音お嬢様、おはようございます。折角の土曜日、このくらい休まれるのが丁度良いですよ。アンジェリカお嬢様も旦那様もまだお休みです」

「真田さんおはよう。うっかりしてた、私アーヤに車届けないと！」
「それでしたら、今朝早くにアリーシャお嬢様からお電話がございました。お昼までその場で待つようにと夢咲学園長からご指示があったそうです」

ティアラ代表は流石だなあ…とぼんやり感心をした後。「はあ、助かった」肩で大きく息を吐き、吾華音はダイニングの椅子に腰を下ろした。
『おかげさまでつましい胸にならなかったよ、後で話あるから時間空けといて』とアンジェリカにショートメッセージ。

のんびりと朝食を摂る最中、ふと脳裏によぎるものがあり、朝食を程々で切り上げて急ぎ身支度をすると、挨拶を済ませガレージからNSXを出した。

ここからスターライト学園は歩いても遠くない程度だが、その短い距離をスプリントレースもかくやの速度で走り抜ける。警備員に挨拶をして

門をくぐるや、空砲のような乾いた音が辺りに響く。二発、三発。車を置いて駆け出そうとすると、音の方向から見覚えのある生徒が。

「召苗先生、お早いお着きですね」

「さくらちゃんおはよう、まさかアーヤ…アリーシャ、新に試合申し込んだりしてないよね？」

「大丈夫です。このさくら、召苗流現師範から稽古立会人を仰せつかった身、きちんと拝見しておりましたよ。常識の範囲の稽古です」

「よかった、キミが言うなら安心だよ…にしては凄い音してるけど」

「お2人の技の相性なのでしょうか、素晴らしい組み手で全く危なげないのですが…音は驚きますね。人払いの方が少々…ですが、おとめ様としおん様が手伝って下さいましたので」

「ありがとう、貸しイチだね」

「お気になさらないで下さい。あれほどの稽古に立ち合えるなら…」

やり取りの最中、2人の姿が見えてくる。一見届いていないアリーシャの掌打が放たれる都度、新の後ろの芝生から土煙が上がっている。あれが音の原因のようだ。やがてアリーシャがこちらに気づき、型を解いてこちらに駆け寄ってきた。

「アカネはやかったねー、電話したの伝わってなかった？」

「聞いたよ、だから急いで来たんだよ」

「お姉ちゃんおはよう、もしかして試合受けると思ったの？」

「アーヤが無理に仕掛けるかと思ったの」

「信用ないなー。そんなことしないよ」

「アリサちゃんはおちゃんとおじいちゃんの言いつけ守ってくれてるよ。北大路先輩もついて下さってたし」

「ならいいけど…って随分芝生荒らしたね。涼川先生月曜日怒るだろうな…うう」

「心配無用！アタシと入れ違いに造園屋さん来るから！」

「そもそもなんでまた外なのさ」

「それは…」

新が目を逸らす。道場の方に目をやると、畳屋の車と建設会社の車がやって来て何か作業している様子。

「先生、新さんをお叱りにならないで下さいまし。アリーシャ様の突き本当に素晴らしいもので、あれを咄嗟に害なくいなすのはいかに新さんでも困難だったかと」

「床板と畳で済んだからいいじゃん！すぐ直るって！経費アタシ持ちだし！」

「ごめんなさい…」

可愛い妹がしょげてしまった。アーヤめ！と内心思うも、道場の様式がうちの流派のそれじゃない以上、仕方ない事か。宗家の許可の上の組み手である以上、自分から言う事もない。

アルテミアフのおじさまに敷地お借りする時期かな、と思いつつ、吾華音が口を開く。

「怒ってないよ。遠からずなんとかするから、それまで組み手はスタライの外の林の中でやりなさい。地面の感じはあっちの方が道場に近かったでしょ。それとさくらちゃん、悪いけど立ち合いこれからもお願いできるかな」

「ええ、勿論です」

「ありがとう、今度みやびちゃんとの手合わせまた見せて。それとアーヤ」

「な、何だよっ！」

自分だけ怒られそうな気がしたアリーシャ、若干構える。

「見たところ新から一発も打ち込まれてないよね？」

「だってアラタ、受けるばかりで打ち込んでくれないし！」

(アリサちゃんが打つ都度私も打ってるんだけどな…)

(わかってるわかってる新、みなまでゆーな)

姉妹で小声でやり取りの後、あえて爆ぜた地面が本来アリーシャが受けている打撃とは伝えずに、吾華音が提案をする。

「私が1発だけ打ち技出すから、ちゃんと受けて」

「ほんと！？アカネの技…怪我するかもね…」

言葉の内容に反して、アリーシャは満面の笑み。しかし吾華音は素っ気ない。

「大丈夫、これは私も使える技の中で、数少ない怪我しない奴だから。手短に行くよ」

「いつでも来い！」(ロシア語で)

アリーシャが構える。

瞬間、吾華音が新に目配せ。新は慌てて北大路に駆け寄り、その耳を塞ぐ。視線は吾華音の首に注がれている。

次の瞬間、軽く吾華音の胸元が膨らんで、一瞬で戻る。同時にアリーシャの耳には鋭い金属音のようなものが。直前に感づいたアリーシャだったが、阻止動作は間に合わなかった。目を開けると吾華音に抱きとめられていて、間の何秒か意識が無かった事に気づく。しかし、吾華音がアリーシャの肩をぽんぽん、と軽く叩くと、感覚はすぐに回復した。

離れたところで新が「先輩、大丈夫ですか？」と声をかけていた。北大路は頷くが、いつもの優しい笑顔ながら冷や汗を浮かべている。

視線に気づいた吾華音は、ウインクして「ミンナニハナイショダヨ」とひとこと。

「アカネひどい！打撃って言ったじゃん！」

「いやいや打撃だよー？ちゃんと筋肉使って打ってるよ？」

「ぶー」

アリーシャはわかりやすい力のぶつかり合いを望んでいたようだが、自分もアリーシャも怪我をする結果にはできない。それは今でも技を受け継ぐ者として、吾華音の矜持だった。

信頼していたとはいえ吾華音にとって恐ろしいのは新だ。自分が何をするかをちゃんとわかっていた。タイミング以外何も伝えなかったのに。加えて、新自身は目に見える防御をしていない。既に手合わせしても流派の技だけでは勝てないかもしれない。

そんな事を考えていると、機を見計らったかのようにベンチに置いてあったアリーシャの鞆からオフヴォーカルのOnestepが流れた。電話の受け答えを済ませたアリーシャが、鞆と帽子を手にして言う。

「あ、アカネ。学園長が迎えに来てって。アタシもう行くね。アラタ、サクラ、ありがとう。オトメとシオンと、昨夜のみんなにもよろしくね。シュンさんにもドーナツごちそうさまって」

「ええ、このさくら、しかとその伝言承りました。またいらして下さいまし」

「アリサちゃんまたねー」

「あ、アーヤ」

「なあに？アカネ」

「頼み事があるんだ。今晚連絡するよ」

「珍しいじゃん、楽しいことならいつでも待ってるよ」

先程とはうってかわって、年相応の可愛げある笑顔で吾華音の言葉に応えたアリーシャ。車に乗り込むと窓を開けて手を振り去っていった。

入れ替わるように、有栖川おとめ、神谷しおん両名が校舎の方から近づ

いてくる。吾華音の姿を見るや、元気な挨拶の音が。

「先生おはようございます！もうアリサさん帰っちゃったのですか？」

「学園長がお呼びでした、用事が済んだら来て欲しいと」

「2人ともおはよう、入れ違いだったよ。人払い手伝ってくれたんだってね、ありがとう。あ、学園長の件了解、すぐ行くね」

「おとめももう少し見てたかったのです…」

「アリサさんの掌の速さも凄いですけど、新のカウンターもっと凄いですね」

「ええ！？しおんちゃん、新の掌見えてるの！？」

「わたくしも当てた瞬間は見えるのですが、ストロークが見えているのはしおん様だけなようでした」

「あ、でもあれは受けられないです。受けられるなら新の稽古、私も付き合いたいんだけどね」

「神谷先輩、恐縮です」

「いやいや2人とも凄いや、ぽわプリアイドル界で格技でも最強説だよ」

喜んで2人を絶賛する吾華音の姿を見ながら、ぽわプリの面々は同じ事を考えていた。

『新(ちゃん)とアリサさんはアイドルに入らないんですか…』

「さて、学園長室行ってくるよ。お叱りでないといいなー。あれ…」

小走りしかけた吾華音の顔が少しずつ赤くなる。

「どうされました？先生」

「さっきの(技)でブラのホック外れた…」

「お姉ちゃん、それ呼吸法間違えてるよ…」

呆れ顔の新に付き添われて、吾華音は先ず更衣室に向かった。
道中、新に「挙動が見えたら失敗」「胸とお腹両方均等に」とダメ出しを受ける。どうして新が平気だったのかは聞けなかった吾華音、頼もしさと一抹の寂しさを覚えつつ「男性の先生と会いませんように！」とやや子供っぽい心配を。

数分の後、学園長室の扉の前にやってきた吾華音。ノックして招かれた部屋には意外な顔が。嬉しそうに声をかける。

「エリサさん！結婚式以来です！」

吾華音の声に笑顔で答えたのは、ジョニー別府の妹、エリサ。

「吾華音ちゃん久しぶり。兄さん今日休みだったけど、近くまで来たからあらためて披露宴のお礼を言いに来たの」

「ソーシャルダンスのレッスンのお礼と言われたけど、私じゃないのよね。どうしてだったのか聞いてない？吾華音」

(学園長もいいかげん鈍いな…)

「さ、さあ。でもレッスンのお相手とは昨夜一緒でしたよ」

「えっ？ティアラさん？電話では何も言ってなかったわ？」

「電話？」

「昨夜メールが届いたから折り返し電話をして、ちょっとお話したの。そうそう、その時ティアラさんが、あなたに見せてあげてほしいものがあるって言ってて」

「??何でしょう…」

「随分前に兄さんから届いた暑中見舞いなんだけど…」

エリサが葉書を手渡した。裏面は写真、まだ若さが見えるジョニーの隣で笑顔で踊る、まだ幼い少女。赤毛の髪に翠とオレンジの瞳。手書きで一言添えられている。

『頼もしい仕事仲間と共に』

「懐かしいね、吾華音ちゃん、凄く立派になって…吾華音ちゃん!？」

溢れた涙で視界がぼやける。葉書が濡れないように手渡そうにもよく見えない。嗚咽で声も出ない。そのまましゃがみ込んでしまう。その背中に優しく触れて、ハンカチを差し出す織姫学園長。

「ティアラから聞いたわ。私は驚かないわよ？近くでずっと見ていたもの。でも…よく辿り着いたわね。おめでとう。あなたを誇りに思う。この学園の職員の一員として」

そのまま声を出して泣き出してしまった吾華音に代わり、エリサに事情を説明する織姫学園長。

「兄さん言ってなかったんですか!？会うたび私には話してたのに…」
「確か亡くなったご両親と吾華音のお母様の親戚が旧知よね？彼なりに気を遣ったんじゃないかしら」

話の最中、ドアがノックされる。大空・氷上両名の声が聞こえるや、しゃがんでいた吾華音の姿が宙を舞い、学園長の机の向こうに消えた。エリサの掌にひらりと葉書が乗る。

顔を見合わせた後、眉を寄せつつ少しだけ笑う織姫とエリサ。どうぞ、と声をかけ扉を開けたエリサの姿に、2人から歓声が上がった。

その後私たちもウェディングドレス着るイベントがあつて、等々、披露宴という舞台にまつわるガールズトークに花が咲くのを笑顔で見守りつつ、織姫学園長は机の陰で小さくなっている吾華音にショートメッセージ。

『今回の件、嬉しいけれど慌てています。あなたがここを離れそうで』

少しして返事が。

『私はお許しがあるうちは、軸足はここに置いていたいです。いけないでしょうか』

『今やそれは、私がお願いすること。これからもお願いします』

『学園長にそう言って頂けて本当に嬉しいです。私に居場所を下さって、ありがとうございます』

織姫学園長の指が止まった。深呼吸して、優しい顔で返信を。

『こちらこそ。私の夢を支えてくれてありがとう』

机の向こうで微かに鼻をすする音が。

織姫学園長の頭に、もう15年近くも前になる光景が甦った。

そういえば、初等部の頃の吾華音は結構泣き虫だった。

尊敬する祖父からの愛を受けられずこちらに来た事に、吾華音はしばらく心を痛めていた。実力を理由にスタッフ登用したのは、吾華音の気晴らし、自分の実益として、お互いのためになった。でも。

過ぎたペースで大人びさせてしまった責任は、主に私にある。

ティアラ学園長の提案、乗ってみる事にしよう…

指を通して、想いを言葉に。

『ティアラ学園長に聞きました、来月のライブ、楽しみにしています。あなたが溜め込んできた夢を、よかったら私にも見せて』

しかし、返信は意外な内容。

『私の夢は、溜め込むことなく出し尽くしています。代わりに、新しいとびきりの夢をご覧にいます。是非いらして下さい』

気がつくのと、大空・氷上両名の視線が学園長の顔に注がれている。そこで自分が神妙な面持ちでいることに気づいた。

「学園長どうされたんですか？」

「お邪魔でしたら席を外しますが…」

ことこういうことに神経質な氷上が心配そうに口にする。

「ごめんなさい、少し考え事をしていたの。2人とも、エリサさんをカフェテリアに案内してくれないかしら。四葉シェフのドーナツ、お土産にさせていただいて」

「お気遣いすみません、織姫さん」

お礼に続けて、エリサがそっと耳打ちする。

(吾華音ちゃんに、いつもみたく笑って、って伝えて下さい)

微笑んで頷く学園長。やがて部屋のドアが閉まる。

「さて…お楽しみは後でもいいのだけれど、ヒントくらいは貰えないのかしら」

「私の星はバックステージでずっとちゃんと輝いていました。だから、その光の先、今のバックステージの星、そのまま前に持ってきちゃいます。ステージの星がその光をどう受け止めるか、確かめてみたくて」

「あなた1人のステージかしら？」

「いえ…すみません学園長、新をお借りします。あと、外部から2人」

昨日の今日で、吾華音の意志は既に固まっているようだ。

心踊る気分を抑えて学園長が言う。

「待つて、それ以上は本番を待つわ。プロデュースはティアラが受け持つようだけど、私にも中身が知れない程度にできる事があれば言って頂戴。…笑うかもしれないけれど、ドキドキしているの」

少し赤い目のままで、吾華音は嬉しそうに応えた。

「その鼓動、裏切りません！ここでの時間に賭けて！」

召苗吾華音を知る者全てが待ち侘びた時間が、動き出そうとしていた。